

## マルサス批判者としてのジャロルド

吉 田 秀 夫

### 一

凡そ經濟學史上の地位は、論者の理論内容によつて定めらるべきものであるにも拘はらず、當該論者の時代に於いて大なる注意を蒐め得なかつたといふだけの理由で、不當なる黙殺乃至は過少評價を受けてゐるものは、學史上稀としない所である。吾々がこゝに忘却の中より拾ひ上げやうとするジャロルド T. Jarrold も亦その一例である。彼が吾々にとり興味あるのは、唯マルサス批判者としてのみである。彼れのマルサス批判は、其の最も早きものゝ一つであり、其の批判の對象は、マルサス『人口論』第二版（一八〇三年）である。問題の書は次の如くである。

T. Jarrold, *Dissertations on Man, philosophical, physiological, and political; in Answer to Mr. Malthus's "Essay on the Principle of Population,"* London 1806.

この書に現れたるジャロルドのマルサス批判の中には、小見によれば、極めて注目すべき見解がある。經濟學史上注目せらるべきは、それが理論の發展に對し、客觀的に實質的に寄與せる點に限られる。こゝに重要なことは、客觀的に實質的に、といふことである。従つてジャロルドが主觀的に意識的にそれを如何に評價したかも、又同時代の又は後代の論者が彼れの所見を同様に主觀的に意識的に如何に受容れたかも、こゝでは問題にならないのである。要するに論者の主體的判斷の如何は、理論の歴史を辿るに當つては、單に第二次的のものであるに過ぎない。

ジャロルドが在來、マルサス批判者として、僅か乍らも認められてゐるのは、二つの點に關してである。すなはちその一はマルサスを理解せざるマルサス批判者の一人として、その二は所謂生存權論者としてである。彼がマルサスを理解せざるマルサス批判者の一人に數へ擧げられてゐるのは、蓋し故無きことではない。一般的に云へば、彼れの著書は、誤解と譴言と罵倒と嫌味とを以て殆んど盡きるとさへ稱し得るのである。例へば彼れのマルサスに關しての無理解は、彼が次の如く云ふ時に、明かに現れてゐる。

『我著者（マルサス——筆者）は、彼れの自惚れてゐる所であるが、人口に對する妨げを追及し、それを罪惡及び窮乏の部類の下に列擧し、そしてそれを自然法則の中に位せしめたる後、躍起になつて、殺人を、或る場合には、自發的行爲ではなく必要な行爲として辯護する程に、この妨げが全力を發揮することを願望してゐる。』（註一）

これは明かにジャロルドの誤解である。蓋しマルサスは、罪惡及び窮乏に屬する妨げを一度と雖も推奨したことはなく、寧ろこれ等の妨げを排したればこそ、それ等とオルタネイヴの地位にある道徳的抑制を推奨したのであるからである。

又彼が所謂生存權論者の一人と稱せられることにも、十分の理由がある。マルサスの『人口論』第二版には文字だけとしてはそれは後には削除されたけれども——次の如き強硬な文字が現れてゐたのであつた。

『既に占有せられたる世界に生れたる者は、若し彼が正當なる要求を爲し得る兩親から生活資料を得ることが出來ず、且つ若し社會が彼れの勞働を要求しないならば、食物の最小の部分に對しても何等の權利の請求をなし得ないし、そして事實上この世に存在する必要はない。自然の大饗宴に於いて彼れの爲めには空席はない。自然は彼に去れと告げ、そして彼が來客の或る者の憐憫の情を動かさざる限り、自然は速かに自らの命令を執行するであらう。若しこれ等の來客が立ち上つて彼に餘地を作るならば、同一なる恩恵を要求しつゝ他の闖入者が直ちに現れる。來る者總てに食物の備へがあるといふ知らせは客間を無數の請求者を以て満たす。饗宴の秩序と調和とは攪亂され、以前に支配した豊富は稀少と變る。そして客間の凡ゆる部分に於ける慘苦と依倚との光景によつて、並びにそれを期待すべく教へられたその食物を見出し得ないで、正當に腹を立てゝゐる人々の、騒々しき強談によつて、來客の幸福は破壊される。總ての來客が豊かなる饗應を受けんことを欲しつゝも、而も限りなき數に對しては備へ得ないことを知つて、慈悲深くも、食卓が既に満員の

際には新來者を容れることを拒んだ所の、饗宴の大主婦によつて發せられたる、總ての闖入者に對するかゝる嚴重なる命令を、犯したこの誤謬を、來客が今覺つても、それは遲きに過ぎるのである。』(註<sup>2</sup>)

ジャロルドはかゝる見解に反對する。そして自然の大饗宴に未だ空席がある限りはその狹隘を嘆ずるの必要はなく、占有せられざる土地が尙ほ多く残つてゐる限りは人口が食物の相對的不足によつて壓迫せられてゐる筈はないと主張する(註<sup>3</sup>)。それと共に彼はマルサスを次の如く揶揄することを忘れなかつた。

『僧正は、饗宴に與り得やう爲めに、食祿にありつかうともがいてゐる、副牧師に(マルサスは副牧師であつた——筆者)、次の如く云ふ權利を有つのだ、「行け！ 御前には空席はない！」副牧師は、自分は餓えつゝあると云ふかも知れない、「それは私の知つたことではない。御前が期待する權利を有つ御前の友人は、御前を援助する能力がなく、私はその意思がない。門衛、務をせよ、そしてこの寄邊なき哀願者を戸口から衝き出せ。』(註<sup>4</sup>)

されば一般にジャロルドが、單に、マルサスの誤解の上に彼れの生存權否定に反對した、と云はれてゐるのは、必ずしも誤つてゐる譯ではない。従つて又彼が一般に默殺又は過少評價せられてゐることには、相當の理由があるのである。併し乍ら理論の發點を辿るべき經濟學史に於いて問題とせらるべきは、人ではなくして論點である。故にジャロルドなる人が如何に全體として默殺に値する所説を爲したとしても、吾々は彼れの無數の誤解の間に散見する注目すべき論點までも默殺すべきではないのである。

ジャロルドの所説中、理論の發展に客觀的に實質的に寄與せるものとして注目せらるべきは、食物増加力及び人口増加力に關するそれである。後者は更に情欲に關する所説と増加力そのものに關するそれとに分たれる。従つてこゝに紹介すべき彼れの注目すべき所説は、三つとすることが出来る。すなはち其の第一は食物増加力に、其の第二は情欲に、其の第三は人口増加力そのものに、關するものである。吾々は以下順次にこれを紹介するであらう。

註<sup>1</sup> Jarrold, "Dissertations on Man," p. 19.

註<sup>2</sup> Malthus, "An Essay on the Principle of Population," 2nd ed., pp. 531—532.

註<sup>3</sup> Cf. Jarrold, "Dissertations," p. 27.

註<sup>4</sup> *Ibid.*, p. 21.

## 二

マルサスの人口理論に於いて、主動的支配的地位に立つものは所謂食物である。現實の質と量とに於ける食物が生活標準と數としての人口との乗積を決定する。前者は能動的作用を有ち後者は受動的地位にある。マルサスはかくの如く説く。併し實は食物なるものは決してア・プリオリの存在ではなく、ア・ポステリオリの存在でなければならぬ。換言すれば所謂食物は、存在するに先立つて先づ生産されなければならない。この意味に於いてマルサスは誤つてゐる。併しマルサスは、過去の生産に對しア・ポステリオリたる食物は、現在の

人口に對してはア・プリアリである、といふことを以て、この難點を回避しやうとしてゐるのである。

一見した所かゝる説明によつてマルサスの困難は解決されたかに見える。併し吾々は次の事實を看過することを得ない。すなはち、マルサスは、第一に、抽象的人口増加力が現實の人口増加力に實現される過程は、直接的妨げによつて規定せられると云ひ、第二にこの直接的妨げは究極的妨げによつて規定せられるとし、第三にこの究極的妨げは現實の食物によつて規定せられると説いて、結局現實の人口は現實の食物によつて規定せられると推理したのである。この推理過程を更に進めるならば、吾々は、第四に、現實の食物は生産の體制によつて規定せられる、と附加しなければならぬ筈である。然るにマルサスは、規定關係を遡つて現實の食物まで達し、そして何等の正當な理由なくして遡及をこの點で止めてゐるのである。然らば何故に遡及は正にこの點で止められなければならぬのであるか？ 現實の食物は過去の生産に對してア・ポステリオリであつても現在の人口に對してはア・プリアリであると云ふならば、同様に、人口の直接的妨げは究極的妨げに對してア・ポステリオリであつても、人口に對してはア・プリアリであるとの理由を以て、遡及を食物にまで辿ることを否定し得ることにはならないであらうか？ 結局規定關係の遡及は、マルサスの如くに食物を以て停止すべきであるならば、同一の理由によつて、同時に、食物に到達してはならぬことにもなるのである。

云ふ迄もなく食物を以て停止することは誤謬である。吾々は生産の體制にまで到達しなければならぬ。それは常にマルサスの所謂食物を規定するといふだけではない。實は彼れの所謂食物が人口を規定する過程も

亦、これを通じて行はれなければならない、換言すればこれによつて瀟過せられなければならないのである。かくて所謂現實の食物は後退しなければならない。そして生産に當つて人類が相互に結ぶ關係及び其の體制が、前面に出て來なければならぬのである。

この方面よりマルサスを批判せる者としては——勿論完全な形に於いては——はないけれども——アーチボールド・アリスン Archibald Alison が擧げられ得る。すなはち彼は曰く、

『人類の大部分は凡ゆる文明社會に於いてかくの如き地位に置かれてゐるから、彼等の現在の福祉と彼等の家族養育手段とが主として依存するものは、労働に對する需要である。従つてこの需要は、労働階級の増加が必要とされてゐるか、又は彼等の愉快なる支持に對し餘地が與へられてゐるかの、指示を與へるものである。』(註I)

これによれば、人口を、特殊的には労働者人口を、規定するものは食物ではなく、『労働に對する需要』又は『職業』 employment である、といふのである。さればアリスンが、生産の體制を以て出發點となし、この體制の中に於いて結ばれる關係たる『職業』を以て第一次的なるものとしたことは明かである。實にかくの如き意味に於ける『職業』こそが、『労働階級の増加が必要とされてゐるか』否かを決定するものであり、従つて労働者人口の増減を支配するものなのである。

かくの如くに彼は食物を越えて生産の體制にまで達した。されば彼が、吾々が前に述べた如き、生産の體制

は常に食物を支配するに止らず、更に生産せられたる食物はこれによつて瀦過せられて甬めて人口に達する、といふ關係を、理解してゐたことは、云ふ迄もない。曰く、

『假令生活資料が全體として、人類に豊富に與へられてゐるとしても、特殊な状態に於いてそれを手に入れる困難がないのであらう、といふことにはならない、それを得る手段は或る部分に於いては過剰であつて、而も他の部分に於いては其の限界に接近しつゝあることもあらう、文明生活に於いてはそれのみが自然の倉庫への鍵を人間に與へる所の勞働に對する需要は、停止的でも又は退歩的でもあらう、そして社會の利益は、一つの限界が特殊な状態に於いて人類の増加に對し置かれるべきことを、必要とすることもあらう。』

(註<sub>2</sub>)

かくてアリスンは、假令漠然たる形に於いてあるとは云へ、一言以て蔽へば、單なる食物は問題となり得ず、第一に生産の體制は食物の生産を支配する故に、又第二に生産の體制は食物の分配消費を支配する故に、これこそが第一次的重要性を有するものなることを、主張してゐるのである。吾々の主題たるジャロルドが經濟學史上注目すべきものとなるのは、右の二點の中、その第一たる生産の體制は食物の生産を支配するといふ點に關し、かゝるアリスンの見解の實質的先驅者を爲してゐる點にある。

ジャロルドによれば、食物は人口に先行し且つこれを支配するものではなくして、その反對である。すなはち食物は人間の生産するものであり、その意味に於いて其の支配下にあるものである。成程人間は農業生産に

於いて天候等の自然的條件に支配せられる。併しそれはこゝで云ふ支配關係とは無關係である。こゝで人間が食物を支配するとは、かくの如く自然的條件に服しつゝ生産を爲すか否かを決定するのは人間であるとの意である。すなはち生産に於いて人間が完全に自然を支配してゐるといふのではなく、生産物の市場への供給が『利潤を見込んで従事し、それが最早獲得せられ得ない時には中止される所の、一取引』として行はれるといふ意である(註3)。かくの如く主張して彼は曰く、

『新しき市場が開かれ、又は古い市場に於いて需要が増加せられるとすれば、公けの注意は直ちに刺戟せられ、競争は激勢せられ、そして新しい且つより優れた耕作法が追求せられる。』

『農業は極めて取引の精神 *Spirit of trade* で行はれ、爲めに農業者は普通、如何なる種類の生産物によつて最大の利潤を獲得し得るかを心の中で熟考するのである。すなはち若し彼が都市の近くに住むならば、彼は市場に牛乳以外の物品は送らない。若し彼れの住居が遠方にあるならば、彼は、穀物の栽培が家畜の肥育よりも利する所多きか否かを、正確に考量し、これに従つて行動するのである。』

『彼がそれに従つて行動する原理は、商人がそれに従つて取引する原理と等しい。兩者に於ける動機は利潤である。』(註4)

かくの如くにジャロルドに於いても亦、單なる食物が問題となり得ないことが明かにせられてゐるのである。單なる食物が先行するのではなく、それは人間によつて生産せられるのである。而もこの際、生産は一定

の體制の下に、すなはち『取引』として、『利潤』の爲めに行はれるのである。

かくてジャロルドは、食物増加力に關してのアリスンのマルサス批判の二論點の一つに就き、その實質的先驅者と云はなければならぬのである。

註 1 Alison, "The Principle of Population, and their Connection with human Happiness," Edinburgh & London 1840, p. 87.

註 2 Ibid., pp. 84—85.

註 3 Cf. Jarrold, "Dissertations," pp. 29—30.

註 4 Ibid., pp. 30, 31—32, 32.

### 三

次にマルサスは、通常、人口増加力が幾干の大いさであるかを、情欲の不變なる事實から推理したものとされてゐる。されば次の如きルヨ・ブレンタノ Lujjo Brentano の批判は、人口増加力に關するマルサスの立論の根底を衝くものと一般に考へられてゐる。

『マルサスは次の如く假定してゐる、

- 一、生殖欲なるものが存在し、これが人類の増殖の原因であること、及び、
- 二、この生殖欲は常に不變的であること。

『併し生殖欲なるものは存在しない。人類が子供を産むのは、其の種を保存せんが爲めではない。この動機

は今日では精々の所王侯や貴族の家系に存在するものであり、而もその場合ですら單に稀にしかないのである。而もこの數も亦極めて少數であるから、その状態は人口の増加にとつてはどうしてもよいことである。

……二つの極めて具體的な欲望が人口を増加せしめるものであり、すなはち性的欲望と兒愛心とがこれである。』(註一)

すなはちブレンタノによれば、生殖欲と性的欲望とは異なるものである。そして前者は産兒とは無關係のものであり、後者が兒愛心と共に實際の産兒力と關係あるものである。されば、生殖欲が如何様にあらうとも、性的欲望と兒愛心とがその形態に關して種々なる社會關係によつて規制せられるものである限り、産兒力の大小も亦社會關係によつて規制せられる筈である、といふのである。

かゝる生殖欲と性的欲望との峻別は極めて鋭き論理によるものゝ如く思はれる。さればこそこの點に關するブレンタノのマルサス批判は注目せらるべきものとせられ來つてゐるのである。併し實はこの點は、彼に先立つ既に百年の以前に、ジャロルドの指摘した所であつた。すなはちジャロルドは次の如く書いてゐる。

『我著者は更に、兩性間の情欲は凡ゆる所に於いて同一である故に、代數語に於いて、與へられた數量と考へてよい、と云つてゐる。これは眞實であるかも知れない、併し相似はこれ以上妥當しない。すなはち情愛の同等は同數の子供といふことにはならないのである。』(註二)

『産兒力は情欲と無關係であり、原理は異つて居り、情欲は産兒期よりもより速く始り、且つより長く繼續

する。』(註3)

然らばかくの如きブレンタノの、従つて又ジャロルドの、マルサス批判は、成立するであらうか？ それは或意味に於いて正しく他の意味に於いて誤つてゐる、と云はなければならぬ。

所謂情欲と産兒力とが直接の關係を有つものでないことは明かである。それは事實としても従つて又概念としても異なるものである。従つてこの點に關する彼等の主張が正しいことは云ふ迄もない。そしてこの議論が、進んで、産兒力は情欲以外の因子によつて、社會的諸關係によつて、規制せられるものであると主張するに至る時は、それはより一層正しいことである。人類は、社會的存在である限りに於いては、抽象的な産兒力を有つものではない。然るにマルサスは、自然に於けると同様に社會に於いても亦、抽象的な産兒力を前提してゐる。されば抽象的な産兒力は社會には存在しないと主張する限りに於いてこの議論は確かに一つのマルサス批判として成立することが出来る。併しこの議論は、マルサスは情欲の不變より直接に人口増加力の幾干なるかを立證せんとしてゐると云ふ限りに於いては、全然一つの誤解に墮してゐるのである。

成程マルサスは繰返して情欲の不變を強調してゐる。『では情欲の不變なる事實は、何が故にかくも屢々繰返して、マルサスによつて強調されたであらうか？ それは主觀的に云へば明かにマルサスのゴドウィン批判に基礎を置くものである。ゴドウィンはその可完全化説の演述に當つて、情欲の滅亡を豫言してゐる。そしてマルサスの「人口論」の出版が可完全化説の批判をその主體的動機の中に含むものである限り、彼がかゝるゴ

ドウインの憶説に明確に對立する必要のあつたことは當然のことに屬する。』(註4) さればこそ彼は情欲の不變を強調したのであるが、併し彼はこの事實から直接に人口増加力の幾干なるかを推理したのでは決してないのである。

マルサスの人口増加力の大いさの立證法は次の如きものであつた。すなはち彼は、一方では情欲の不變、他方では妊孕力の不變を定立した。後者は人口増加の物理的可能性の不變を示し、前者はこの可能性が實現せられる機會の不變を示すものである。かくて彼はこれ等二つの事實から——人口増加力が幾干の大いさを有つかではなく——人口増加力の『不變』を推理したのである。

例へば彼が妊孕力の不變を主張してゐることは、次の如き彼れの語によつて明かである。

『女子の自然的多産性は、世界の大部分に於いて殆んど同一であらう。』(註5)

又彼れが情欲の不變と妊孕力との兩事實を基礎として人口増加力の不變を推理したことは、次の如きによつて知り得るであらう。

『理論も經驗も、兩性間の情欲か女性の自然的多産性か、社會の進歩に於いて減少する、と吾々が信ずることを、正しとはしないであらう。』(註6)

かくてマルサスは人口増加力の不變を定立した。そこに一般周知のアメリカの經驗的增加率が出て來る。これは既に妨げられたる増加率である。故にマルサスは、人口増加力の不變を前提しつゝ、人口は、少くともア

メリカに於けるが如く二十五年を一期として倍加し続ける如き増加力を有するものである、と主張したのである。

されば、マルサスを以て、情欲の不變より直接に人口増加力の大きさを立證せんとせるものなりとする、誤解に立脚する批判は、一切成立し得ざるものである。

註<sub>1</sub> Brentano, „Die Malthussche Lehre und die Bevölkerungsbewegung der letzten Dezennien,“ 1909; „Konkrete Grundbedingungen der Volkswirtschaft,“ Leipzig 1924, S. 227—228.

註<sub>2</sub> Jarrold, „Dissertations,“ p. 275. Cf. Malthus, „Essay,“ 1st ed., p. 128; 2nd ed., p. 347; 6th ed., Vol. I, p. 529.

註<sub>3</sub> „Dissertations,“ p. 298.

註<sub>4</sub> 拙著『經濟學說研究』——マルサスの人口・歴史・經濟理論——一五七頁。Cf. Godwin, „An Enquiry concerning Political Justice and its Influence on General Virtue and Happiness,“ London 1793, Vol. II, pp. 851—852.

註<sub>5</sub> Malthus, „Essay,“ 5th ed., Vol. II, p. 139; 6th ed., Vol. I, p. 476.

註<sub>6</sub> Ibid., 5th ed., Vol. III, p. 402; 6th ed., Vol. II, p. 483.

#### 四

かくの如くに、マルサスは決して、情欲の不變から直接に人口増加力の大きさを推理したのではない。従つて彼に就いてこのことを肯定的に主張するジャロルドの批判は確かに成立し得ないものである。併しジャロルドは、單にこの點に就いてマルサスに論理的矛盾のあることを指摘せんが爲めに、この批判を爲したのではな

かつた。實は彼は、女性の産兒力又は妊孕力の可變性を主張して以て人口増加力の不變を否定せんが爲めに、先づ産兒力と情欲との無關係を主張したのである。すなはちマルサスは、情欲の不變と妊孕力の不變との二事實から人口増加力の不變を定立したのに對し、ジャロルドは、情欲の不變はこの點を論ずる際には無關係のことであるとし、次いで妊孕力の不變を否定し、従つて當然に人口増加力は可變的なるものであると主張したのである。

ジャロルドは先づこの産兒力又は妊孕力の可變性を、同一の身分の者でもその境遇の異なるによつて産兒力を異にすることから、主證せんとしてゐる。すなはち曰く、

『労働しなければならぬ人間は力を誇としてもするであらうが、併し研究に一生を費す者がかゝることを誇とするのは馬鹿々々しいことであらう。農業者であつた貴族は、農業者の間で、大いに食ひ、飲み、且つ眠り、そして大きな體軀になつた。併し新しい秩序が起つて來た、そして槍の操縱を喜んでゐたものは今や大國民の上院を構成してゐる。彼等が單なる農業者であつた間は、家系は共通である。當時彼等は殆んど考へるといふことをしなかつた。併し今や政府の複雑なる事柄は、深遠なる思想と倦むことなき努力とを要求する。彼等にとつては、勇氣や體軀は必要でもなく望ましくもない。行動することではなく熟慮することが彼等に好ましいことなのである。』(註I)

『現代と過去との貴族の相違は、全然追及の對象にある。彼等は何れも缺乏の怖れと其の結果とから免れて

ゐる。彼等は農民の家族を減少せしめる種々なる害悪を殆んど知らない。併し一方の時期には貴族の食卓は多數の子孫をもつて取巻かれてゐるが、他方の時期には殆んど席は満たされない。この事情は或る原因を指示するものであり、そして私は、平靜な無思慮な生活と、危惧と配慮とに費される生活との、異なる結果以外には、他の原因を知らないのである。』(註<sup>2</sup>)

更に又彼は同一の時期に於いても貧富の程度に應じて産兒力の異なることを主張して曰く、

『貧民は其の窮乏の中にあり乍ら支持すべき最も多數の家族を有つてゐると長い間云つてゐる。吾々は口を有つが彼等はパンを有つ、といふことは格言とせられてゐる。併し上流は、彼等の同朋中の最も貧しい者よりも、遙かに窮乏から免れて居り、又罪惡や道德的抑制の厄を蒙つてゐないのである。』(註<sup>3</sup>)

貧民は多數の子供を産むのに、上流は窮乏も又罪惡や道德的抑制も少いといふのであり、結局後者はその産兒力が減退してゐるといふのである。

かくて彼れの云はんとする所は、同一の時代に於いてはより、上流の階級に屬するもの程、又同一の階級に就いては時代がより、進歩する程、自然的妊孕力は減少し行くものである、といふことであつた。このことに對する原因として彼が擧げてゐるものは、次の如くである。

『私が今眼指してゐる總ては、最も思慮的な人間は、一體として考へれば、産兒力が最も少である、といふ事實を確立するにある、こゝに思慮的とは、それが未開人のものであらうと又は哲學者のものであるとを問

はず、精神の凡ゆる強烈な行使を意味するのである。』(註4)

『この素因(妊娠の素因——筆者)は、危惧、所勞、氣質の大なる感受性、及び指摘する必要のない各種の他の原因の如き、諸事情によつて、促進せられ又は遅延せられるであらう。私の唯一の目的は、妊娠は組織の一定の状態に依存し、そして組織は外部的影響によつて影響を蒙る、といふ一般的事實を證明するにあるのである。』(註5)

更に彼は進んで、かくの如き事實を基礎として、社會の文明の進歩と妊孕力との關係を説き、前者の進歩によつて後者は原則的に遞減し行くものではあるが、而も或場合には遞減することのないことを主張して、曰く、『女性の産兒力は、大なる程度に於いて、彼等が到達した文明の状態に依存するものであり、従つて文明を知ることによつて増加率が計算せられ得やう、といふことが證明されたならば、それで十分である。』(註6) 『不健全なる制度は、文明社會に於いて、多産的なることを證明すること極めて一般である、と私は主張する。』(註7)

かくて彼は、社會は極めて文明に於いて進歩してゐるのに、而も貧民の數は極めて多い故に、『不健全なる制度』が存在するに違ひないとして、マルサスの救貧反對論に反對するに至つたのである。

以上の如き所論に於けるジャロルドの基礎的見解は、自然的妊孕力は、人間が『思慮的』になればなる程、又は『精神の凡ゆる強烈な行使』が、『危惧、所勞、氣質の大なる感受性』等が、より大なる程度に發展すれ

ばする程、減少し行くといふことである。そしてこのことは結局、進歩と妊孕力とは背反的な方向に働くといふことを主張せんが爲めのものであつた。従つて彼はこの進歩の内容を以て『思慮的』となることとなりとなしたことになる。かゝるジャロルドの見解は、吾々をして次の如きヘンリ・チャアルズ・ケアリ Henry Charles Carey の所説を想起せしめるものである。すなはちそこに於ける『神経系統の發展』といふのが正にジャロルドの『思慮的』となることを指すものである。

『總ての綱、門、族、種、及び個體を通じての、生物の一般的法則は、次の如く述べられ得るであらう。

『多産性の程度は神経系統の發展と反比例して變動する、——より大なる頭腦を有つ動物は常に産兒力が最小であり、そしてより小なる頭腦を有つものはそれが最大である、

『生命を維持する力と、繁殖の力とは、相互に對立する、——その對立は不斷に平衡の樹立に向つてゐる。』

(註8)

こゝに於けるケアリの所説の中に於いて、最も重要なことは、個體の發展と生殖力とは互に對立し而も常に平衡を形成せんとしてゐるといふことである。そして『神経系統の發展』云々は單にその證明材料と考ふべきである。蓋し吾々が生命の生産及び再生産を總關聯に於いて觀察したる時に見出さるべきは次の事實であるからである。——すなはち、生物の支出し得る力はその吸収せる力以上に出ずることを得ない、然るに力の支出は個體としての自己自身の維持か又は種としての自己自身の維持に向けられる、されば一方への力の支出の

増大は當然に他方へのその減少を結果すべきものである、といふことである。

ケアリは右の事實に、『神経系統の發展』云々といふ事實より接近したのであつた。これはいさゝか一面的な觀察であるといふことが出來やう。併し吾々は、その出發點の一面性にも拘らず、寧ろかゝる事實に到達し得たことを、ケアリに就いて重視しなければならない。そしてジャロルドは神経系統の發展と同一事に歸する思慮的となることから出發して漠然たる形に於いてははあるがケアリの結論に到達した點に、その學說史上の意義を認めらるべきであらう。

註 1 Jarrold, "Dissertations," p. 271.

註 2 Ibid., p. 272.

註 5 Ibid., p. 292.

註 3 Ibid., pp. 283—284.

註 6 Ibid., p. 299.

註 4 Ibid., p. 273.

註 7 Ibid., p. 305.

註 8 Carey, "Principles of Social Science," 3 vols. Philadelphia etc. 1858—1859; Vol. III., ed. of 1869, p. 302.

## 五

ケアリの所説とジャロルドのそれとはかくの如く相通するものであるが、併し右の引用文だけから見ると、前者が生物一般に關して樹立した理論は後者に於いては單に人間に關してのみ定立せられてゐるに過ぎない様に思はれるであらう。併しジャロルドも亦次の如く書いて、全自然界に就いてこれを定立してゐたのである、

すなはち――

『この論題は、其の性質上、全然人類に限られてゐる様に見えるけれども、而も其の諸原理は自然の法則に基礎づけられ、そして類推によつて支持せられ得やう。園圃で保護されてゐる兎は、不斷の危懼に脅かされてゐるものよりも、一年のより早い時期に子供を産み、そして一季節により、多くの若ものを産む。兩者の食物は豊富であらう、併しこの動物の臆病さが自然の聲を窒息させるのである。瘠せた牧場に妨害されずに行つてゐる牝馬は、毎季節に其の子供を産む。併し既によく養はれそして狩獵の訓練を受けた同一の牝馬は、全然子供を産まない。最も年若の頃に捕へられ、そして飼ひならされ、そして明かにそれに好適な待遇を受けた象は、決して若ものを産まない。同一のことは大抵の種類の鳥類に就いても云ひ得やう。假令大きな飛ぶ空間を與へられ、そして最も好む食物を食つても、而もそれ等は決して巢を造らない。これ等の事實は、動物の増加が、動物の情欲又は生存資料の豊富以上の或るものに依存することを、示すに十分である。』(註一)

可變的人口増加力に關する理論がかくの如き形となるに至る時は、吾々は、次の如きトマス・ダブルデイ Thomas Doubleday の所説を想起せざるを得ないのである。

『植物及び動物の兩者の増減を左右する如く見える一般的大法則はこうである、すなはち、或る種、又は屬が危険に瀕する時には、常にそれに相當する努力が、普く、其の保存と繼續との爲めに、産兒力又は多産性

の増加によつて、自然により爲され、そしてこのことは特に、かゝる危険が正當な營養分又は食物の減少より發した時には常に起り、爲めにその結果として窮乏の状態又は窮乏の状態は多産性にとり好都合であり、そして又過剩的狀態又は飽和の状態は多産性にとり不利であり、その率は各々の状態の強度に比例し、そしてこのことは自然を通じて普く、すなはち植物界に於いても動物界に於いても、そうである。』(註<sup>2</sup>)

併し乍ら理論の發展はかゝる程度に止るものではなかつた。ダブルデイの如き營養と産兒力との間にのみ相互關係を認める所説は否定せられた(註<sup>3</sup>)。産兒力と相互關係を結ぶものは單なる營養ではなく、環境一般となつた。すなはち前述せる如き、個體の吸收せる力の個體保存と種の保存とへの支出の間の *alternative* な關係が發見せられるに至つた。それはハアバート・スペンサアによつてである。すなはち彼は曰く、

『個體完成 *Individuation* と生殖 *Genesis* との間の對立 *antagonism* は、各項目(生長、發展、活動力等の諸項目——筆者)の下に集められた總ての事實によつて證明される。吾々は、最も低い型から最も高い型に登るにつれ、絶對的に考へ及ばずそして數字で現はすことさへ出来ない程の大きいさの多産性の減少があるのを見た、そして型の優越が相對的大いさにあるか、より大なる複雑性にあるか、より高き活動力にあるか、又はこれ等のものゝ若干又は全部にあるかは、最終的推論にとつて關する所ではない。この場合吾々にとつて十分な、明白な事實は、物質と運動との集成と特化とが最高の程度まで齎された有機體は、増殖率が最低に落ちたものである、といふことである。産兒力の低減のどれだけが質のより大なる集成により、どれだけが

其のより大なる特化により、どれだけかより多量の集成され且つ特化された運動によるかは、云ひ得ないことかも知れない。そして又云ふ必要のないことである。これ等は總て、より高級なる生物の、環境の諸作用の中に於いて有機的平衡を維持する能力の増大の、——すなはち自己保存の力の増加の——諸要素である。そして吾々は、それ等が變る所なく隨伴するものは、種の保存に於ける物質又は運動又はその兩者の支出の減少であるのを、見出すのである。』(註4)

『略言するに、證據を検討すれば、吾々が存在しなければならぬと推論した關係は存在してゐることがわかる。一般的材料から論じて、吾々は、種の維持の爲めには、破壊的勢力と抗爭する個體の能力が小であるのに比例して、子供を産出す能力は大でなければならず、又その反對でもある、といふことを見た。他の一般的材料から論じて、吾々は、自己保存の勢力と種保存の勢力とは勢力の *common stock* から得られてゐるのであるから、他の條件にして等しければ、一方の増加は他方の減少を包含するといふことに必然的になるのを見たと。そして次いで特殊的事實に轉向して、吾々は、この反比例的變動は、動植物界の双方を通じて明かに辿り得ることを、見出した。従つて吾々は、次のことを一法則とすることが出来るであらう、すなはち、凡ゆるより高級なる有機的進化は、其の隨伴物として、より低級なる、新有機體の生産に於いて見られる特異なる有機的分離を、有つのである。』(註5)

かくの如きスペンサー説への發展は一日にして行はれたのではない。それはマルサス批判と新らしき研究と

の長き發展の後に甫めて到達せられたものである(註6)。そして又このスペンサー説は、カウツキイの手によつて、異なる視野から異なる理論領域の中に綜合せられるに至つてゐる(註7)。かゝる長き發展の歴史を辿らうといふのはこの小論の目的ではない。吾々は唯理論的發展の『後方から』その以前の歴史を眺めた時に、こゝに述べたる如き方向への發展の端緒がかのジャロルドによつて起されてゐるのを發見するのである。云ふまでもなくジャロルドの所説は、それ自身としては殆んど黙殺に値するかも知れない。そして又この方向への理論的發展の大道のみから見るならば、彼は左して注目に値しないかも知れない。併しこの發展の道の中で彼れの論點の二三を中心として見るならば、本論に於いて述べたる如き評價は十分に彼れに値するものと考へられるのである。

註1 Jarrold, "Dissertations," pp. 273—274.

註2 Doubleday, "The True Law of Population shewn to be connected with the Food of the People." London 1841; 3rd & enl'd ed, 1853, pp. 5—6.

註3 Cf. Herbert Spencer, "A System of Synthetic Philosophy," Vol. III. : "The Principles of Biology," Vol. II. 1884 ed., pp. 483—485 n.

註4 Ibid., p. 471. 註5 Ibid., pp. 471—472.

註6 拙著『マルサス批判の發展』第四章第一節を參照

註7 Vgl. Kautsky, "Malthusianismus und Sozialismus," "Neue Zeit" 29. Jhrg., I. Bd., und "Vermehrung und Entwicklung in Natur und Gesellschaft," "Internationale Bibliothek," Nr. 50, 1921.